

令和 2 年 5 月 21 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16876

研究課題名(和文)留学生とのメンタリングを活用した英語学習支援の効果に関する実証的研究

研究課題名(英文) A Research on the Effects of English Language Learning Support Sessions with International Student Mentors

研究代表者

歳岡 冨香(Toshioka, Saeka)

近畿大学・文芸学部・講師

研究者番号：40708468

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では英語学習支援プログラムが学習者に与える効果を調べた。同プログラムはIELTS受験を目指す大学生・大学院生に、留学生が90分間の英語学習セッションを8回提供する。分析対象は1.課題英作文、2.学習者のアンケート回答、3.学習セッションの文章記録、4.学習セッションの音声記録である。分析の結果、プログラムが英語学習意欲や異文化への関心を高め、英語学習効率を向上させていること、特にセッション中の英会話では、相手の発話に対し説明を求める意味交渉の場面が語彙や文法の学習に寄与しており、さらにセッションを重ねるなかで留学生が意味交渉を意図的に使い、教育効果をあげていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではグローバル化の進む大学キャンパス内環境を利用した先駆的な英語学習支援プログラムの効果を、学習記録や参加者アンケート、参加者の課題作文、会話データの分析に基づき明らかにした。研究成果が示すように、同学習支援プログラムは学習者の意欲や異文化への関心を引き出し学習効率を高めており、これは今後、大学で同様のプログラムを展開することが、学習支援に有用であることを示している。また会話データの分析は「明確化要求」のような意味交渉ストラテジー使用が学習者の言語運用能力の向上に寄与することを示唆している。これは英語教育学、第二言語習得における意味交渉の役割に関する研究に新たな知見をもたらす。

研究成果の概要(英文)：This research assesses the effectiveness of an English language-learning support program in which Japanese university students were paired up with English-speaking international student-mentors to participate together in eight 90-minute learning sessions. The data collected for the research include short essays written by the learners, their answers to a questionnaire, written records from the learners and mentors on each session, and voice recordings of the sessions. The findings indicate that the program stimulated the learners' interest in other cultures and motivated them to grasp English. Feedback from their mentors also facilitated the learners' language acquisition. Negotiations for meaning during conversations with the mentors helped the learners develop grammar and vocabulary. Finally, the mentors seemed to become aware of the usefulness of negotiating meaning and began incorporating this concept in their conversations to improve the effectiveness of the sessions.

研究分野：翻訳研究、認知的メタファー研究、英語教育

キーワード：英語学習支援 第二言語習得 意味交渉

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 27 年 10 月より大阪大学で運用を開始した英語学習支援プログラム、プロジェクト HELP! は、グローバル化するキャンパスを活かした英語学習支援プログラムである。これは、海外留学を志す大学生・大学院生が IELTS 等の英語検定で留学に必要なスコアを獲得するために必要な、継続的な英語学習を行うことを支援することを目的につくられたものだ。

グローバル化の時代に必要な能力を培うために、大学の交換留学制度等を利用した海外協定校への派遣留学は、大学生・大学院生にとって有用な機会である。しかし、海外において現地の学生と同じように学ぶために必要な語学力を身に着けることは、決して易しいことではないという状況があった。たとえば、協定校へ交換留学をするためには、TOEFL iBT で 79 以上、IELTS で 6.0 以上のスコアを応募時点で手にしている必要があり、英語圏の協定校ではこれよりも高いスコアが多くの場合必要とされる。英語資格試験で高得点を獲得するためには、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングのすべてのセクションでバランスよく能力を発揮することが望ましい。英語力の向上のためには、自律して継続的に学習を進めることが必要だが、個人での学習には限界がある。この背景を鑑み、留学生メンターによるメンタリングを提供する英語学習支援プロジェクト HELP! の開始に至った。

なお、平成 27 年 10 月から平成 28 年 3 月までをパイロット研究期間と位置付け、その期間の参加者に実施したアンケートを分析した。その結果、英語 4 技能のうち、スピーキングとライティング力の向上を期待しプログラムに参加する学生が多く、プログラム終了後にはスピーキング力の向上を実感する参加者が多いという傾向があった。(歳岡 2016)

留学生には、英語母語話者以外にも高度な英語力を持つ学生が多く、英語ライティング指導などの英語学習支援に留学生を採用する取り組みは他大学にもあった。(森村・ヨルグ 2014) しかし、同プロジェクトのように個別のメンタリングを継続的に提供する取り組みは例をみず、その効果を実証的に示すことは、今後の大学における英語教育支援の展開において、有益な示唆を与えると考えられた。以上が、研究開始時における背景である。

2. 研究の目的

本研究は、国際化の進む大学環境を活かした英語学習支援プログラムの先駆けといえるプロジェクト HELP! について、その効果を実証的に研究し、明らかにすることを目的とする。これにより、さらなるグローバル化の進む今後の日本の大学における英語学習支援を考えるうえで、有用な知見を提供することを目的とする。

さらに、研究の方法で詳述するように、本研究では、複数のデータを多角的に分析することにより、具体的にメンタリングのどのような点が英語力の向上に寄与したのかを考察する。これにより、応用言語学、英語教育学の分野にも新しい知見を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

研究対象とする学習支援プログラムは、次のような形で行われた。

はじめに、留学生、英語学習者を募り、ペアを決める。留学生には、英語非母語話者も含むが、要件として、IELTS 6.0 以上の英語力が必要とした。これは、英語で行われているプログラムに参加するとして協定校から来ている交換留学生に課せられている語学要件である。また、プログラム開始前に、日本英語検定協会等の協力を得て留学生へ事前研修を行い、IELTS の試験内容及び特徴や、その教授法についてのレクチャーを実施した。

メンタリングは 1 回 90 分、計 8 回を基準とし、3 か月程度での完了を目標とする。英語学習者と留学生メンターはメンタリング期間中、ウェブシステム (MEnTOR) を使い、学習の記録、メンターによる学習者の英語力評価、学習者への助言等の情報を共有する。これには、運営に携わる教職員もアクセスが可能であり、学習の進捗状況を確認することができる。

英語学習者には、メンタリング開始前と終了後に課題英作文を課した。課題英作文はいずれも 250 語である。開始前の課題英作文では、簡単な自己紹介と、現在の英語力 (たとえば、リーディング・リスニング・ライティング・スピーキングの 4 技能のうち、得意なものと苦手なもの) を、そして、HELP! に参加する上での目標を記述するように指示した。これは最初の学習の題材として、メンターとなるペアの留学生にも共有された。終了後の課題英作文では、HELP! 参加前の英語学習方法と、HELP! での英語学習方法との相違、8 回のセッションのなかで最も印象に残ったこと、さらに今後の英語学習の目標について書くように指示をした。

また、プログラムの開始時に、後述のように同意を得られたペアに、IC レコーダーを配布し、セッションの間、机の上にレコーダーを置いてセッション中の会話を録音してもらった。

最後に、プログラム終了後には英語学習者に、振り返りのアンケートを実施した。

以上がプログラムの一連の流れである。この中でプログラムの効果を測るために、以下の 4 つのデータを収集した。(1) 英語学習者による課題英作文、(2) 英語学習者による終了後アンケート、(3) 学習セッションの文章記録、(4) 同意を得られた参加者による英語学習セッションの音声録音記録。

データの収集期間は平成 28 年度である。平成 29 年 4 月に研究代表者が所属機関を変更したことに伴い、平成 29 年度以降、研究代表者はプログラムの運営には関わらず、またプログラム参加者の学習記録等のデータを一元的に集めた当該学習支援プログラム専用ウェブシステム (MEnTOR) へのアクセスも行わないため、当初 29 年度に分析及び結果発表と並行して行うことを

予定していた新たなデータ収集は実施していない。

データ収集期間である平成 28 年度には、平成 28 年 5 月から 7 月までと、平成 28 年 11 月から平成 29 年 1 月までの 2 期間（それぞれ前期、後期と呼ぶ）にプログラムを実施した。データの収集数であるが、前期の参加者数 22 ペアのうち、16 ペアのみが最後のセッションまで終えることができ、後期の参加者 33 ペアのうち、27 ペアが最後のセッションまで終えることができた。

分析対象とした前述のデータ(1)～(4)のうち、(1)～(3)については、平成 28 年度前期のプログラム参加者のデータを分析し、後述の 4. 研究成果に記したことを 2016 年度大学英語教育学会関西支部大会で報告した。データ(4)については、前期、後期の参加者のうち、それぞれ同意を得られた 7 ペアずつ、合計 14 ペアに IC レコーダーを配布し録音を依頼した。そのうち最後までセッションを終えることができたペアは 10 ペアであった。このなかで、最初と最後のセッションが録音できていた 6 ペアを分析し、後述のような成果を 2019 年度大学英語教育学会関西支部大会報告した。

4. 研究成果

(1)～(3)のデータ分析より、プログラム参加を通し、参加者に英語学習意欲や異文化への関心の高まりという効果がみられ、さらに適切なフィードバックを得ることによる学習意欲や自信の向上もみられることが明らかになった。また、(4)の分析からは、学習者と留学生が会話の中で行う意味交渉、特に「明確化要求」が語彙や文法等の知識の確認、習得に貢献していることが明らかになった。また、セッションを重ねるにつれ、留学背は明確化要求を意図的に用いることにより、教育効果を高めようとする傾向も見られた。以下に(1)～(4)のデータ分析を記す。

(1)英語学習者による課題英作文

最初の作文で複数の参加者の作文に共通してみられたのは、「大学入学試験のために英語を勉強したため、リーディングが得意である」という文言であり、参加者の日本人大学生の多くが、リーディングに自信をもっているといえる。一方、スピーキングに関しては「機会がない」そして「自信がない」という記述が複数の参加者の作文にみられた。

一方終了後の作文では、プログラム開始前の作文より、11 名が長い作文を書く結果となった。その内容を分析すると、複数の参加者が「有益な助言が得られたこと」「異文化交流を行うことができ、関心が高まったこと」「英語学習への意欲が高まったこと」を挙げており、これらの要素に関して参加者の自覚的な効果が得られたことがわかる。

(2)英語学習者による終了後アンケート

終了後のアンケートでは「留学生とのメンタリングを経て得たと感じるもの」という項目に対し、最も多い 44%が「英語を話すことが上達した」を選び、次いで 19%が「英語を学ぶ意欲が高まった」を選んでいことから、プログラムが学習者のスピーキングの技能に関する自信、また英語学習への意欲の向上につながったことがわかる。

また、興味深い点として、同プログラムでは、英語を母語としない留学生もメンターに含まれることが影響したと思われる次の点が挙げられる。これは、「メンターとの英語での会話で、メンターの言葉が聞き取れないことがあった」という項目に対する回答が、「全くなかった」が 0%、「あまりなかった」が 19%に対し、「ときどきあった」「よくあった」がそれぞれ 56%と 25%という結果であり、その理由を尋ねると「メンターの発音がなじみのないものだったから」という選択肢に最も多い 54%が集まったことだ。なおその他の回答は「メンターの話すスピードが早かったから」に 23%、「メンターの使う言葉が難しかったから」に 15%、「その他」に 8%となっている。これまで参加者が学校教育のなかで触れてきた英語の発音は、母語話者のそれが多く、このプログラムで英語非母語話者のメンターと英語で会話する機会を得た結果、それに戸惑いを覚えたという様子が伺える。留学を目指す学生たちにとって、留学先の海外の大学において英語で意思疎通をとらねばならない相手は、英語母語話者に限らない。多様な英語に慣れ、聞き取る能力は、学習者の希望通り留学が実現した後も役に立つものだ。この回答傾向は、同プログラムが、学習者が多様な英語に触れる機会としても、重要な役割を果たしたことを示唆している。

(3)学習セッションの文章記録

MEntOR 上に記されたセッションの文章記録から、セッションのペースを調べたところ、3 か月間のすべての期間にわたり、いずれのペアも比較的バランスよくセッションを行っていることがわかった。さらに、各ペアが各セッションで 4 技能のどの技能について学習したかを分析し、各技能に関する学習に平均幾つのセッションが使われたかを調査した。1 つのセッションで複数の技能に関する学習が行われる場合も多いが、平均すると、スピーキングが 6.3 セッション、ライティングが 5.1 セッション、リスニングが 1.4 セッション、リーディングが 1.2 セッションであり、スピーキングとライティングの技能習得に、多くのセッションが使われていることがわかった。

文章記録には、「留学生と会話をするセッションは、自分の英語スピーキング力の向上に効果的だ」という自覚や、「セッションの開始時点では英語を話すことに不安があったが、今ではトピックを与えられると、良いアイデアが浮かび話すことができるようになった」という学習者の気づきが記されており、同プログラムで英語を話す機会を得たことが、英語を話すことへの自信や、

英語力の向上につながったと学習者が感じていることがわかる。

また、前項と同様、多様な英語に触れる機会をこのプログラムが提供したことを示唆する結果も見られた。これは留学生のメンターの友達と会話をする機会を得た参加者の記述にあり、色々な国出身の留学生が、多様な特徴を持つ英語を話すことに気づいたという出来事が記されていた。

(4)同意を得られた参加者による英語学習セッションの音声録音記録

第二言語習得において、その際に意味交渉を行うことから会話は有効な学習方法であると指摘されている。(Long 1996, Mackey 2012)これは、前述した6ペアの最初と最後のセッションの音声記録を文字化し、分析した。複数ペアの会話の文字起こしデータ分析により、個々に特徴的なものと、全体に共通する傾向の両方を俯瞰することが可能になる。また最初と最後のセッションのデータ比較を行うことで、セッションを重ねるなかでの意味交渉のストラテジーの変化を明らかにすることができる。なお分析対象とする6つのペアのうち3つはメンターが英語母語話者、3つはメンターが英語非母語話者である。分析では、学習者と留学生が会話の中で意味交渉を行う部分、特に、相手の発話が理解できない場合に使われるストラテジーに着目した。

分析の結果として、まず会話データは、会話中における意味交渉の場面の数や、その意味交渉ストラテジーは、メンターとなる留学生が母語話者であるか否かに左右されないことを示唆している。それよりむしろ、学習者側がどれほど会話に関わることができたかという点が、会話における活発な意味交渉に影響を与えている可能性が高い。

さらに、意味交渉場面の会話を分析すると、以下の点が明らかになった。1)意味交渉のストラテジーのうち、「明確化要求」が質問の形のみでなく、発話の一部を繰り返す形でも行われること、2)それが語彙や文法等の知識の確認や習得に貢献していること、3)最初と最後のセッションを比較すると、学習者の側からは会話の流れを保とうとする力が働き明確化要求が減る傾向があるが、留学生の側からは意図的にそれを用いてセッションの教育効果を高めようとする傾向がみられること。

本研究成果が示唆するように、グローバル化する大学環境を活用した同プログラムは、学習者の英語力や英語学習意欲を高め、学習を効率化し、多様な英語に触れる機会を与える有効なものである。今後同様のプログラムを展開する際の提言としては、学習者に以上のようなプログラムの効果を明示するとともに、実際のセッション実施に関して、メンター留学生と学習者の双方に、質問や聞き返し等により積極的に意味交渉を図ることの重要性を伝えることがあげられる。具体的には、学習者には事前に、質問、聞き返しのフレーズ例を示し、積極的に会話に介入することを促すことが有用であろう。また、留学生には、一方的な質問に終始するのではなく、学習者からの質問を引き出すような会話を行うよう助言をすることが有用であろう。

<引用文献>

Long, M. H., "The role of the linguistic environment in second language acquisition", W.C.Ritchie and T.K. Bhatia (eds.), *The Handbook of Second Language Acquisition*, 1996, 413-468.

Mackey, A., *Input, Interaction and Corrective Feedback in L2 Learning*, Oxford: Oxford University Press, 2012.

森村久美子・ヨルグ・エントジンガー、留学生を活用した English Writing Consultant-バイリンガルキャンパスにおける留学生のリソース活用、工学教育研究講演会講演論文集、2014、566-567

歳岡冴香、留学生とのメンタリングによる英語学習支援の試み、大阪大学高等教育研究、4、2016、87-91

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 歳岡 冴香
2. 発表標題 英語学習支援セッションにおける日本人英語学習者と留学生との会話にみられる意味交渉について
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 歳岡 冴香
2. 発表標題 大学内の異言語・異文化環境を活かした英語学習支援
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部秋季大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考